



伝聞録 國學院大學

体育連合会射撃部

六日午前一時四十五分、B29爆撃機『イノラ・ゲイ』号が、コノ爆弾「リトルボーイ」を積んでテニアン島から広島上空へ飛んだ。三日後の九日第二番目の原子爆弾が長崎市に投下さる。鈴木総理はボツダム宣言受諾を決意したが、宮中の大本営地下壕で開かれた最高戦争指導会議は、降伏か決戦かで真っ二つに分かれ、鈴木総理はついに天皇陛下に最後の決断を仰いだ(昭和二十年八月十日午前二時)。

八月三十日、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥は、愛機「バターン」号で、敗戦国日本へ第一歩を厚木飛行場に印した。

國學院大學射撃部の創設功労者、『射撃の鉄人』故名譽監督河野(旧姓和田)武典先輩が関東州大連の大連第一中学校(旧制)を昭和九年に卒業し、彗星のごとく東京に現れ本學で学び卒業されたのが昭和十四年であり、それはまさに激動する昭和に身を置く青春であった。昭和九年、本學部国文学科予科に入学し、大連一中時代に十分磨き上げた射撃の腕前を思う存分に本土の大会で発揮したいとの思いもあり、早速射撃部に入部した。が、愕然とした、部銃は僅か三挺(三十年式一挺含む)で部

員は自分を含めてたったの六名であったのである。

当時の大会は、関東学連主催(日本史上初の学連)の全国学生春季、秋季大会、東京帝大主催の全国高専大会、京都帝大主催の全国高専大会、拓殖大主催の全日本大学高専大会の他日本帝国射撃協会主催年二回、明治神宮大会(現在の国体)等があったが、団体戦は一組十名なので、本學は選手が足りず弓道部等の部外者を借りて出場し五十組中四十位前後が常であった。(一校複数組出場可)昭和十年、早くも二年生で主将に任ぜられると、奮起して部の構築に取り組み、まず部員数を二十名までに増やし大連時代に研究工夫した『ある技』を全部員に仕込み猛練習し、明治神宮大会に出場し団体入賞を獲得した。その結果、本學当局から三挺の三十八年式銃を御褒美として買ひ与えられた。それは、学校としては部構築の功を労うものであり、部にとっては願ってもない最もふさわしいプレゼント品の受領となった。

昭和十一年十月十八日、本學は全日本学生射撃連盟結成記念兼第一回全日本学生射撃競技選手権大会(会長は一條實孝公爵、東京府大久保射撃場、関東・関西・東海の三支部對抗戦・二十六校對抗戦、使用銃三八式歩兵銃・三百m五発速射・限秒三分)に出場し、二十六校對抗戦で団体優勝(選手：高桑順一、荒巻時夫、木村真三郎、宮地榮人、杉本繁、行弘桃太郎、杉田美智治、渡辺昭、古屋正資、和田武典)、個人でも行弘桃太郎選手が43点で優勝(二位学習院大の佐藤、三位慈大の吉見)、

優勝間違いなしとされていた河野武典選手は四位に甘んじたが、三支部対抗戦に関東支部代表として出場、獲得点数47点で日本最高記録を樹立し優勝した。(東京日日新聞)

この47点という記録はその後のいかなる大会でも破られず、もじどうり河野先輩は日本記録保持者となったのである。以後本學は常勝軍となり、とくに明治神宮大会・大学高専の部に於いて昭和十二年団体優勝(選手＝高桑順一、荒巻時夫、宮地榮人、安原実行、渡辺 昭、松本、宇都宮小澤、杉田美智治、和田武典)、そして河野先輩卒業の年は団体準優勝にと輝いたのである。

この間、河野先輩は個人優勝三回の他は常に五位以内であった。また、東京オリンピック代表五名を選ぶ予選が三回行われて、三回とも先輩は一位で通過して、殆ど代表に決定であったが、大会が中止され幻の代表となった。『東京に河野あり』と言われ、その名が東西に知れ渡るのはこの頃である。秘話として、先輩は帝國陸軍から度々呼び出されて小石川射撃場、大久保射撃場に赴き、陸軍射撃教官、陸軍兵器本部員のままで、その射撃術を披露した。陸軍兵器本部では昭和十三年九月ごろから、口径六・五mmの三八式歩兵銃(明治三十八年に軍用小銃として制定)にかわって、口径七mm級の新小銃の改良が試作され、名古屋造兵廠案の七・七mm小銃が昭和十四年に正式に制定された。この年が皇紀二五九九年であったことから、この新小銃は、九九式小銃と名付けられたわけであるが、もとより河野先輩は九

九式小銃の開発に貢献し、さらに、当時の陸軍の伏射姿勢は射面に対して形成する体の角度をおおむね三十度前後としていたものを、四十五度のものをもって最適であると提唱し、自らは六十度(大連時代に修得)にて射撃し集弾率の高さを証明している。その後の陸軍は射撃教練では『四十五度をもって適当とする』とし、教範を変更している。(戦後、河野先輩は近代競技射撃の様にスリングを使用する場合には、でき得る限り角度を浅くし、低い姿勢が取れる様にと指導されている)

本學を卒業して大連実業学校に奉職してからは、実業学校の射撃部も育成し、杉原(現姓松本)由浩選手以下有力選手を引き連れ、昭和十五年(紀元二六〇〇年)再度東京に出現、十一月、第十一回明治神宮大会射撃競技中等学校の部で近藤選手が入賞、翌年同大会で関東州が優勝、十二月第十五回全日本中等学校射撃大会府県対抗戦でも、関東州が優勝し百武選手が日本一に輝いている。

なお昭和十七年十月、最後の開催となった第十三回明治神宮大会射撃競技一般の部では関東州が優勝に輝いている。その団体選手の一員に河野武典、そして大連一中時代に河野部員から射撃教授を受けた古勝靖朗選手の名があったことをここに記しておく。

昭和十九年卒業の平尾旨剛先輩が個人優勝を果たしたのが、千葉県習志野四百m射撃場の三八式歩兵銃十発競技会である。戦時中ではあったが学生選手多数参加のなかでの大殊勲であった。この大会は平尾選手

以外は全員が二位という変則的なものではあった。つまり同僚の二宮選手(五十三期)・孫副選手(五十三期)ほか全参加選手の標的には弾痕が皆無であった訳だが、平尾選手は必中の信念で敢闘一発の命中弾を撃ち込んだのである。射撃中遠く離れた標的上にしゃもじ型示点桿(弾着位置を射手に知らせるための棒)がヒューーと出た時の喜びは如何ばかりであったか。

関東州が優勝した明治神宮大会射撃競技、大学高専の部で本學は団体五位に入賞した。競技方式は、まず駆け足で四kmを走破し、伏的にたいして試射二発、本射五発を発射するという伏射競技であった。本射限秒五分、競技銃は三八式歩兵銃であり、競技直前に射手に手渡された。この時、平尾選手は二発を命中させ入賞している。個人優勝には三発の命中弾があった明治大学の岡田伝三選手が輝いたとのことである。

なお、この時の本學団体選手であった坂本選手、松本選手、松山選手、山崎選手は戦死されたと声を詰まらせてお話になっていた。

ところで武器、武具、武士道、武人、武芸、武術、武道館等々の『武』には『戦を止める』という抑止力としての意味の『魂』が込められており、その意味合いを無視しますと思わぬ誤解を招きますので、ここで厳に確認させていただきます。

さて戦後の昭和二十一年二月、天皇陛下は全国巡幸を始められました。この巡幸は、昭和二十九年の北

海道まで距離にして三万三千kmにも及んだのであります。

またこの年、荒廃した人心にスポーツを通じて希望をとりもどそうと日本体育協会の発案により、第一回国民体育大会が近畿一円を中心に分散開催された。

す・わ本學の有志も各人が秘蔵しておいたスプリング銃をもちより、他大学に先んじて活動に入ったのである。

昭和二十二・三年ごろになると射撃界各方面の諸氏により関東・関西で『日本射撃倶楽部』という呼称で躍動が見られるようになり、復活の機運も高まり、ようやく昭和二十四年九月十五日にクレイ射撃と合同で『日本射撃協会』として正式に発足し、昭和二十六年五月三十一日に日本体育協会に加盟、同年十二月十四日に国際射撃連合(U. I. T.)に再加盟が認められた。その後、昭和二十八年一月三十日、クレイ射撃競技を分離して『日本ライフル射撃協会』が創立された。なお、第四回国民体育大会は東京で開催され、これにライフル射撃は公開競技として参加している。そして、第五回の広島大会から正式種目として認められた。このころ平行して、戦前の日本学連創設の功労者であった故日本ライフル射撃協会名誉会長師尾源蔵先生の戦後の大活躍が始まるのである。それは先生が常にモットーとしていた『学生自治による競技射撃』、その戦後の実現のために師尾先生自ら各大学へ飛び込んで相手方が納得するまで何度も訪問説明し、何名かの有志学生を集めさせるといふ渾身の

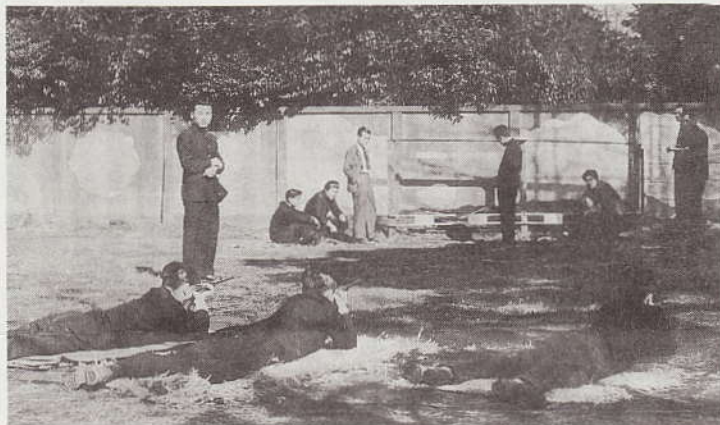
努力と辛抱が必要とされる巡行であった。そしてようやく昭和二十八年六月に創立会を開くまでにこぎつけるのである。(明治大学初代監督在学現役中に主唱して大正十三年十一月三日、第一回関東大学高等専門学校大会を東京府赤羽射撃場で開催した。この大会を契機として、翌年二月八日関東学生射撃連盟が結成されたのである。)

さて、昭和二十七年までは本學には当然のごとく射撃場は無く、渋谷の丘の本學運動場(現体育館)横にあった旧校舎の御不浄と旧弓道場の僅かな空間で、隣の吸江寺のコンクリート塀に標的を置き練習するという日々であった。使用された銃は国産の中折スプリング式で、なぜかその時代、レコード楽器店でも一挺売阡門で、無許可で購入することができた(マニアはドイツ製のダイアナを戦前から所持)。ちなみにそのころの流行歌は『りんごの歌』『啼く小鳩よ』『東京の花売娘』等、童謡は『みかんの花咲く丘』である。河野監督の激励により本格的な部活動に入ったのは昭和二十五年ごろからで、國學院大學正式登録射撃部として復活を果たし、その後射撃部の方向性を確立されたのが明石(現姓今副)喜臣、平山八郎、北條俊朗の六十二期の三先輩である。……ひきつづき大きな壁、本學事務当るへの登録はままならなかった。戦後まだ間もないことでもあり、ライフル射撃に対する世間一般の理解度が薄いこともあり、それは並の考えでは解決しそうにもなかった。平山部員は主将(戦後初代)

に就任すると、昭和二十八年の紀元節から解決策の検討に熱中し、桜の蕾が開くころ、ようやく一案を得ることができた。それは本學全学部(当時は政経学部、文学部の二学部)の学生全員に趣旨を説明し、了解を得た上で、こぞって部員登録書に署名してもらい、当局に対し登録申請書と共に部員名簿を提出するという前代未聞のものであった。政経学部の授業中に『かくかく、しかし、射撃部を創設するので賛成者は署名せよ』との紙が回ってきて、驚き感動したのは北條生徒であった。……その後、努力の甲斐あって晴れて本學登録が叶ったのである。(部員総数三百人であった。当時の本學生総数の三割に当たる。)

同年六月二十八日霧雨の中、小石川屋内射撃場に東西の八大学合わせてOB十数名、学生約三十名が集まり、ささやかながら日本学生ライフル射撃連盟復活創立会が開催された。再建発起人の一人である河野監督出席、そして学生メンバーの中には、明石・平山・北條の三学徒の緊張した顔もあったのである。復活学連初代会長には東京大学OBの木梨信彦氏、理事長に芹沢新平氏(明治大学OB)副理事長に河野武典先輩が就任し、学連幹事長に明治大学の横山長幸部員が推薦され、日本学生ライフル射撃連盟は、いよいよその飛翔期を迎えたのである。そして芹沢、河野の名コンビは、学連構成の根幹である規約の作成に入り、行事開催等諸問題に次々に取り組み解決していくのである。それは、戦後時代にマッチしたものでなければならず、

又学連の恒久的発展を見越しての重要な作業であった。この結盟より三カ月の同年九月十三日、最初の積極的活動行事として連盟結成記念競技会を小雨降る中、本學運動場片隅のわが造り射撃場で開催した。始射式には、当時の本學の石川岩吉學長にお務めをしていただいたのであります。裏話として、その始射的に弾痕が無く、平山主将が釘で真ん中に穴を開けて、學長にお届けしたこと、北條選手が記憶している。またその時、芹沢理事長は河野副理事長と共に平山主将に同行して運動場内にある學長宅へ、ご挨拶に参上したと



ころ、御褒美として「お祝い」とお酒を頂戴しかえって恐縮したと後に語っておられる。

この記念すべき大会には、関西からも二校がはるばる遠征してきて参加出場し東西合計九校で開催された。そして國學院大學体育連合会射撃部は団体優勝を獲得したのである。

(六十三期の天野恒彦、中島 稔の両選手が団体を組む、個人は一位天野、二位平山、三位中島)それは戦後学生射撃の復活を告げる輝かしく壮快なるページェントでもあった。

そして、この時の下級生部員(六十三期、六十五期)が、その後も各大会に優勝者・準優勝者・入賞者を続々と輩出していくわけで、いわば本學の第二回目の黄金時代であった。

(昭和二十九年十月、第一回全日本学生射撃選手権と銘打って公式大会が開催された。場所は中野警察学校射撃場と小石川射撃場で、参加は十五校で、エアライフルのみで行われ、団体優勝には同志社大学が輝いた。第二回大会は昭和三十年十月、大阪城南射撃場と大阪府警察学校射撃場で行われ、明治大学が団体総合優勝を獲得した。この大会からSBとARの総合成績で順位を決めるようになった。第三回大会は昭和三十一年十一月、神奈川県富岡射撃場で慶応義塾大学が団体総合優勝を獲得している。)

ところで、学連結成の前年の昭和二十七年(西暦一九五二年)第15回オリンピック・ヘルシンキ大会で日本復帰(日本史上初のライフル選手として明大OBの猪熊幸夫氏、監督に同じく明大OBで現日ラ会長の



昭和28年9月13日、学連結成記念大会優勝のとき前列左より水上、天野、中島、後列左より袖山、北條、一人おいて木元、明石、一人おいて平山

安斎 實先生)。大会後、文部省より各大学に米国製のSBシルバースリンダー銃が有料で配給された。しかし時代が時代だけに、その資金集めには、これまた大変な苦勞が要された。またその頃、他大学でもAR競技銃として使われたのが、ヘイリンカン三回ポンプ式、シャープ三回ポンプ式であった。本學射撃部においても買い替えされながら昭和四十二・三年ごろまで競技銃として生き続けることとなる。両銃とも、国産だけあって日本人向きに設計さ

れ、使い馴れた者にとっては優秀な銃であった。口径は四・五mmでジェット弾を使用し銃腔内回転よろしく命中正確であった。

本學射撃部の女性部員第一号の久野孝子選手(七十五期)も、ポンプ銃の名手であり、その美貌と華麗なる射撃姿勢には、本學はもちろん他校男子選手の憧れの的となり話題を呼んだものである。久野部員が四年生の年、同輩菊地(現姓鈴木)秀夫選手が十月の全日本選手権(朝霞射撃場、国体選手・五輪強化選手多数参加)に出場し、特大の花火打ち上げに成功している。それはFSBR3P百二十発競技に七位入賞、FAR3P百二十発競技は準優勝(一位は埼玉県の関根選手、三位は明大の篠崎選手)というものであった。花火の打ち上げに成功と言え、
「努力の男」ワルサーUITの名手・横田雅夫君(八十五期、現コーチ)の名を上げねばならない。現役中昭和五十一年に一部復帰を果たし、その年の十一月全日本学生でSBRR3P個人五位入賞(一位明大の市村 忠、二位同じく明大の猿渡「現姓若林」秀子)、SBR団体七位入賞と大健闘した。(関東FSBR伏射六十発競技会では、みごとに個人優勝に輝いている)

これはその当時、他大学に対し《國大の復活》という意味合いで十分に脅威を与えたのであった。国産競技銃の量産は昭和四十三年に東京ライフルから発売されたシャープ120X(サイドレバー一回ポンプ式無振動銃)、後継銃パンターゲットシリーズが最後となった。

昭和四十年前後からAR競技銃として台頭してきたのが不安鐘我奪(フラインベルグバウ・サイドレバー式スプリング、スライド無反動銃、西ドイツ)であり、ことごとく大会の優勝銃となるのである。SBは、メルボルンオリンピックまではソヴィエト連邦製の笑夢杖(エムツェー)、虎(タイガ)が主流であり、昭和三十九年(西暦一九六四年)の東京オリンピックからは西ドイツ製の闇出都(アンシュッツ)がその王座としての地位を獲得している。その後、フリースタイル射撃からスタンダード射撃にルール改正されると、闇出都種射撃(アンシュッツチンコネタル)、悪詐UIT(ワルサー)なんてな銃が台頭するのである。しかし昭和二十年代の大穴にしろ外国の銃は、その名を漢字に直すと、何ゆえにこうも不思議で怪しい感じになるのか・・・?

話を戻して、120Xは本學でも部銃として発売と同時に一挺購入しており、ときの一年生部員(八十期)がよく練習に励み十一月の新人戦において団体六位に入賞している。なお、これより先に行われた春関(五月)では、SBR・ARR団体総合三部三位となりII部復帰を果たし、ARR団体の石川 明選手(七十八期)が、三姿勢立射で182点をマークし種目個人優勝(学生新)に輝いている。使用銃はフラインベルグバウ・ヘビーバレルであった。つづいて秋関(十月)でSBR・ARR団体総合II部四位、I部昇格を狙える位置を確保した。また、この年に河野監督のもと安達謙司先輩(六十五期)

が正式にコーチに就任している。とにかく新人戦を最後に昭和四十三年は、次年に向けて良いムードで活動を終えたのである。あくる昭和四十四年の活動は、三月に三十八代主将石田 裕部員(前年の伏射大会、春関、秋関にSBR団体選手として出場)の卒業後、四月一日〜七日の朝霞春季合宿(二十一名参加)から始まった。宿舎(朝霞旅館)には、何度も河野監督が陣中見舞にいらしての叱咤激励、額に汗しながら、監督自ら畳の上で伏射姿勢をとり、射手の心構え、射撃技術、本學の伝統等々を熱心にお話になっていた姿には、部員全員心に深く期するものが生じ、自然と練習に身が入ったものである。それから一カ月半後の五月、本學は、戦前そして戦後の一時期を通してのお家芸「伏射」で、久しぶりに光輝くこととなるのであります。すなわち、この年の最初の大きな競技会、関東学生ライフル射撃伏射選手権大会(於朝霞オリンピック射撃場五月二十四日・二十五日)で、優勝候補の法政大学を大きく引き離してARRは団体優勝(学生新)を獲得し、SB・ARR団体総合でも四位入賞(前年は十三位)と大殊勲をあげたのである。ちなみにARR団体出場選手は初日は、林 正明(四年584点五位)、石川 明(四年584点一位、学生新)、競技二日目は、本間恒夫(二年580点八位)、吉川辰夫(四年571点)、太田寛道(三年580点十位)であった。SBR団体は、小野寺 栄(四年)、三田芳治(四年)、永越英世(四年)、相原敏行(四年)、田辺秀登

(三年)の各選手が健闘し八位入賞に食い込んだ。

この大会は、当時の日ラ会長の福島慎太郎氏、同理事長の安斎 實氏、学連会長片沢新平氏らの提唱により、今回より『林崎杯』をSBR個人優勝者に贈呈するとして記念すべきものであり、その第一回受賞者に本学の三田芳治選手(七十八期)が輝いたのである。獲得点数は584点(学生新)であった。

『林崎杯』とは、明治大学の学連選手林崎昭裕部員が、第18回オリンピック東京大会ライフル射撃伏射六十発競技に出場し、みごとに六位に入賞(一〇六位までがオリンピックレコード)。しかし数年後、不慮の交通事故により、若くしてその生涯を閉じたことから、生前の功績をたたえ、また学連の伏射競技力向上を奨励するという意味合いから生まれたものであった。

さて、勢いづいた本学はひたすら一部昇格を信じて、六月の春季関東学生ライフル射撃選手権大会に挑んだ。陣容はSBR三姿勢が、小野寺栄(四年)、三田芳治(四年)、田辺秀登(三年)、安藤俊雄(二年)、加藤英文(二年)、ARR三姿勢が、林 正明(四年)、石川 明(四年)、太田寛道(三年)、平山雅章(二年)、手塚敏雄(二年)である。前年の新人戦で六位に入賞し満を持して出場した二年生全員は自己ベストを撃ったが、他の選手は練習時の点数をかなり下回るといふ不振であった。結果は団体総合II部二位で、一位の早稲田大学(試合後I部に昇格)にたったの一点ボッキリ

及ばず無念の涙を飲んだのである。これは、射手個人々々のピーク調整と団体選手選抜のバランスの難しさを証明した出来事ではあった。

安達コーチ、金子俊夫先輩(六十九期)、伊藤 元先輩(七十二期)、青木伸悦先輩(七十二期)の方々が、揃って伊藤先輩の愛車日産ブルーバードSSSで朝霞に応援に駆け付け



昭和四十四年、長野県南小谷で夏合宿。後列左より二人目に本学初の女子部責任者、松岡(現姓成田)啓子の顔もある。松岡選手は昭和四十六年の女子関で個人優勝、団体二位に輝いた。

てくださったのが十一月十五、十六日の両日で、第十六回全日本学生ライフル射撃選手権大会の二日目、三日目であった。本学は前月の秋関でも、春関同様のミスで団体総合II部三位と振るわず、部全体がなんとなく重い空気のままで参加していたのである。ここで、踏ん張ったのが、SBR三姿勢で個人総合六位入賞、伏射種目優勝(198点)の三田選手である。また、ARRでは永越選手が伏射種目四位入賞(197点)、太田選手が同九位(194点)と健闘し今シーズンも終わるにあたり、なんと『伏射の國學院』の面目を保った。

全日本の表彰式も終り、射場にも夕闇が迫ってきたところ、万歳三唱の声があらちちから聞こえて来た。つづいて各校はそれぞれ陣を組み校歌の大合唱に入った。本学もOBの方々と陣でスクラムを組み、國大校歌、応援歌を精一杯の大声で歌ったのである。

つづく

あとがき

私が本学射撃部に入部したのは、昭和四十二年五月も下旬のころであった。久我山高校同僚の宮内君の誘いで、本館校舎屋上射撃場へ行き部員登録を済ませたところ、その場ですぐ銃を渡され伏射姿勢を教わりながら射撃を開始した。その時懇切丁寧な指導を受け、いやこれは案外に大学のクラブ活動というものは、過し安いものかもしれないと正直思っ

たものである。この時、教授して下さったのが四年生の廣田先輩であり、渡された銃はヘイリンカン三回ポンプ式であった。……あれから三十年という月日が過ぎ去ってしまったが、本学射撃部を思うとき、いつも自分自身が現役時代の自分になっていることに気付くのである。……そして思いの最後は、現役諸君に「目標を狙いあてろ」を真に理解してもらい、努力して邁進してほしいと考えるのは私だけであろうか。

今回この稿をいただき執筆に当たっては、古屋正資、平尾旨剛、平山八郎、北條俊朗、安達謙司、金子俊夫、相馬宏二の先輩諸氏から、貴重な体験談と教示を頂き、深く御礼申し上げます。また日本ライフル射撃協会の佐藤麻里子さんには、お忙しいにもかかわらず不肖筆者の意をよく承知して下さい、FAX三十枚に及ぶ感銘深い資料を提供して頂くことができました。

昨年十二月一日晴天の日曜日、故名譽監督河野武典先輩の未亡人トミ子様と、東上線成増駅で待ち合わせをし、新人戦中の朝霞射撃場へご案内することができた。沢山の学生が懸命に取り組む姿を御覧になりながら、我が子を見るように目を細めて絶えず微笑んでいらっしゃいました。また、トミ子様のご紹介により大連一中時代の河野先輩の旧友百束秀雄氏(八十歳、昭久会幹事長)ともお話しすることができました。百束氏も大連一中時代は射撃部の一員であり河野先輩と一・二を争う腕前であり、一緒に上京し百束氏は東京農業大学へ進学し、当初は射撃部に所属



しその後陸上部へ移り活躍されたそうです。
 故名譽監督河野武典先生は我々に
 勇氣と多くの夢を与えて下さった。
 ご本人もまだまだ見果てぬ夢を残し
 て、今は芝の増上寺に永眠されてい
 る。
 長い間懸案であった、部史を多少
 なりとも書けたと自負している。し
 かし、これで肩の荷をおろせたわけ
 ではなく、今後ともご意見を頂いた
 うえで改定版、年表或いは「わたしの
 思い出」の稿を設けたいと思ってい
 ますのでよろしくお願い致します。



写真左上
 河野トミ子様を囲んで
 朝霞射撃場

写真左
 お元気な時の
 河野武典総監督

写真下
 大連実業学校、
 担任クラス記念写真
 最上段左端が河野教師

平成九年一月

東京都八王子市
 太田 寛道

